
遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Nコード】

N7054Y

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまとうしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。

ちよっと変わったタイプ(?)の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

あなたが好きです

「好きです！愛してます！俺と付き合ってください！！」

「断る」

「なんで！？」

「・・・何回フラれたら気が済むの？」

「君がOKを出してくれるまでさ！」

はぁ・・・ウザイ。

何回告白を断ってもすぐに立ち直って告白してくる。

こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒よ。私には付き合ってる人が居るんだから諦めてちょうだい」

「しかしそいつとはもう半年以上も会ってないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるっ！」

いやいや、堂々と「俺と浮気してください」宣言されても困るし。私には心に決めた人がいるのだ。

今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していると言える。

多分向こうもそう思っているはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ」

しっかりと言い切って後ろを振り向く。

背後で何か言っているが、気にしないで歩く。

こいつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの学校帰りだ。

友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子さん？」

「え？はい。そうですけど・・・どちら様ですか？」

「俺の名前は長谷川隆夫。はせがわたかお良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「・・・は？」

これが最初の告白だった。

私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。

しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になったところを告白され続けた。

最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、こうも毎日告白されては断るのを続けていると罪悪感も何も感じなくなって来る。

毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通ってみたけどやっぱりダメだった。

まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。

これはもう訴えたら勝てるレベル。

もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。

そして現在の3週間目。

もう違う道を通るのを諦めていつもの道を通り、相手の精神を破壊するために全力で断り続けている。

しかしあいつの精神力は底なしか？

何度断っても断っても学習していないかのようにつきまってくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するAIを搭載し忘れたのだろうか？

それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。私はリアリストだからそんな話は信じたくもない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹^{かとうまゆき}。

同い年の17才で事情があって大阪へ転校してしまったのだ。

当時付き合っていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくて、大人になったら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。

メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。

きつと正樹も同じことを思っているはずだ。

そう思いながら私は正樹へメールを送った。

あなたが好きです（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。
ます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願い致します。
なんかかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い
文章ですがよろしくお願い致します。

では次回もお楽しみに！

私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。

あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言ってもいいこの学校での友達（とも）の照井明子（てるあき）が風邪で休んだ日のことだった。

明子以外に話す相手がいらない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。

朝、明子にメールをしてみたけど寝ているのか、未だに返信はない。病気は寝て治すのが一番だと思うから返信がないのは仕方がない。今は昼休み。例によって、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついてとても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。

今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。

いつもなら上から下に降ってくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。

この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしれない。

いや、北海道のJRはこんなことじゃ遅れないか。

そんなことを考えながら窓の外を流れていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない？」

ふと横から声をかけられた。

声が出た方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をつけて外を見ている男子がいた。

「ほら。どっか行っちゃう」

そう言われて私は慌てて視線を外に向けた。
吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」

「あの木の近く」

言われた木の近くを見ると、確かに黄土色をしたキツネがいた。
初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、
やはり見れると少し嬉しい。

私自身はこの学校に入って初めて見た。

「俺今年初めて見た」

「私も」

「おい正樹！次移動教室だぞ！」

「うわっ！ちょっと待ってくれよ！ってわけで移動教室だから。吉
野さん。遅れたらダメだよ」

そう言って友達のとこへ戻っていく男子。

どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれ
たらしい。

すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだった。

いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。

彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴ってから慌て
て移動することになっただろう。

ありがたき幸せ。

それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話し
かけてくるなんて珍しい人だ。

理科室に向かいながらさっきの男子生徒について考える。

同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれ

てたような気がする。

私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、さっきはありがとう」

今日最後の授業の前の休み時間。

私は彼にさっきのお礼を言った。

私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼？別にいいのに」

笑いながら、どういたしまして、と言う彼。

「だって・・・えーと・・・」

「ん？」

彼が不思議そうな顔をする。

「ごめん。名前聞いてもいい？」

「え・・・加藤です」

そりゃ驚くわな。

ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしてると自分でも思った。

「もしかして名前覚えてなかったの？」

「ごめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけどさ。でもなんかちょっとショック・・・」

あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか・・・ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談！吉野さんは気にしないで！」

「なんで私の名前？」

「これが普通だと思っただけだなあ」

「私の普通とは・・・私がズレてるのね」

「かもね」

加藤君はそう言って笑った。

「これからもたまに話しかけてもいい？」

「加藤君がいいなら私はかまわないけど」

「ほんと！？良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがた
い感じだったから断られたらどうしようかと思った」

「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとショックだった。

普通に過ごしてるだけなのに。

いや、私の普通はズレてるんだっけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかったし、
それ以外は頼杖ついて外見てるだけだったし」

「だって明子しか友達いないもの」

「そうなんだ・・・じゃあ僕と友達になってよ」

「そこは契や・・・いや、なんでもない。別にいいけど、友達にな
ってどうするの？」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなろうよ。せっかく同じクラスなんだし」

「まあそれもいいかもね。よろしく、加藤君」

「こちらこそよろしく、吉野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。

気長にお付き合いくださいませ。

次回もお楽しみに！

友達

学年が変わり、高校2年の4月。

学年が上がる際のクラス替えがあったけど、私は明子と同じクラスになれた。

加藤君とも同じクラスだ。

加藤君とは明子ほどではないけどそれなりに親しい関係になっていて、連絡先を交換したり私の趣味を打ち明ける程度の仲にはなっていた。

私はオタクである。

明子と友達になった時は

「ねえ吉野さん」

「何？　というか誰？」

「誰ってヒドイな。私は照井明子。そんなことより、そのケータイに付いてるのって・・・」

「え？　わかるの？」

「まあね。私も好きだし」

「へえ。ちよつと意外かも」

「そののどんなところが好き？」

そんな感じで明子とは仲良くなった。

でもオタクであることは二人とも隠していた。

同じクラスにオタクっぽい集団がいるんだけど、あからさまに避けられていた。

時々「フヒヒw」とか「マジで萌えるよな！」とか大声で言ってるのを見ると、あんなのと一緒にされたくない気持ちが芽生えた。

どうしてあーゆー人たちはオタクアピールをするのだろう？

吹っ切れたというよりも、何かしらのオタクであることを自慢して

いるように見えて仕方がなかった。

そんなこともあるせいか加藤君にも隠していたんだけど、これから友達でいるためには話しておかなければいけないと思いそれとなく話してみた。

「私オタクなんだ」

「へえー。そうなんだ」

「・・・それだけ？」

「え？なんかごめん。突っ込んだほうがよかった？」

「いや、なんていうか、オタクだよ？」

「えーと・・・別にいいんじゃない？個性だよ。個性」

全然気にしてなかった。

むしろ喜んでた。

「これって僕しか知らないの？」

「まあ明子は知ってるけど」

「じゃあ男子では僕だけ？」

「まあそうなるね」

「エヘヘ」

なんかよくわからないけど、軽蔑されたりしなくて良かったと思っ
た。

オタクのことを知っても全然態度が変わらなくて良かった。

加藤君はわりと誰とでも話すみたいで友達も多かった。

話しかけられても嫌な顔一つしないで楽しそうに話していた。

今回もクラス替えがあつた直後なのに、クラスのほとんどの人の名前を覚えていた。

今も明子と三人でその話をしていた。

「え？普通じゃないの？」

「加藤君のいう普通ってハードル高くない？ハードルってゆーか棒高跳びの域なんだけど」

「照井さんはもう覚えてるでしょ？」

「名前は自然と頭に入っていくものですよ。加藤君や」

「つまりどういうこと？」

「まだ覚えてないってこと。で、君子きみこは？」

「私に聞いちゃうの？」

「「ですよー」」

三人で笑った。

こんな日が続くと思ってた。

「アンタ最近調子乗ってない？」

ある日、トイレに行った明子を見送った教室で同じクラスの女子何人かが私の席へ来て言った。

もちろん名前は覚えてない。

加藤君は他の友達とどこかに行っていた。

私は意味が分からず聞き返す。

「調子に乗ってるって？」

「最近アンタ正樹君と仲良いみたいじゃん。それが調子乗ってるって言うんだよ」

「それがどうかしたの？」

「そーゆー態度がムカツクんだよ！」

ガンツと机を蹴る。

その音にビクツとなって教室にいた人たちの視線が私の席に集まる。しかしそれも一瞬で、みんな視線をすぐにそらす。

私は思った。

これがイジメってやつか。

実際に自分が当事者になるなんて思ってたから全然実感がなかった。

でも現に今、明子も加藤君もないタイミング、つまり私が一人の時に狙ってきたことはそーゆーことだろう。

からだはいつもよりぎこちない動きをしているけど頭は冷静だった。

「なんか言えよ」

「私と加藤君はただの友達・・・」

「アンタに無理矢理合わせてるだけだったの。それぐらい気づけよ」

最後まで言わずに連れの女子が笑う。

「とにかく調子に乗りすぎんな。次は無いからな」

「君子？」

明子が教室に戻ってきた。

それを確認すると女子達は去っていく。

少しホッとした。

「どうしたの？なんかあった？」

「ううん。ちょっと話してただけ」

「そう？ならいいけど」

教室の異様な空気に気づいて明子が心配してくれたのに、私はごまかしてしまった。

それが全ての始まりだった。

友達（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

しばらく鬱展開が続きますが、あと数話の辛抱です。
お付き合いください。

今回は勢いだけじゃないんだからね！

ちゃんとラブコメにしてやるんだからね！

ということで次回もお楽しみに！

イジメ

あの日を境に私はやたらと絡まれるようになった。

一人の時に悪口を言われるのは当たり前で、すれ違いざまに足をかけられたり、上靴が片方だけ全然違うところにあったり、机の中に画ビヨウが大量に入っていたりもした。

全部挙げるとキリがないけど、全部私が誤魔化せば隠せる範囲のイタズラだった。

しかし私は明子や加藤君に迷惑をかけたくなかったので隠し続けた。明子も私と同じで学校には友達が居なかった（学校外にはいるらしい）から一緒にいることが多かったけど、それでも少しだけ明子が離れるタイミングを見計らってやられていた。

それでも私は明子にバレないようにしていた。

陰湿なイジメが始まって1ヶ月が経とうとしていた。

「君子。大丈夫？」

「え？何が？」

「何がって・・・なんか最近ビクビクしてない？」

ドキッとした。

できるだけバレないようにしていたのに無意識のうちに態度に出てしまっていたようだ。

「そんなことないよ。多分昨日見たテレビが怖かったからかも」

「そう？ならいいんだけど。なんかあったら言ってね」

そんなある日。

机の中に手紙が入っていた。

私は二人に気づかれないうように恐る恐る開いてみた。

『今日の放課後、校舎裏に来い。来なければ照井にバラす』

校舎裏には学校の中からも、グラウンドからも全くの死角になっている場所がある。

多分そこに来いということだろう。

私は放課後、明子に適当な嘘について指示通りに校舎裏に行った。

明子にも加藤君にも迷惑はかけられない。

私が校舎裏についた時には誰もいなかった。

それから10分ぐらい待った。

コツコツとローファーがコンクリートの地面を鳴らす音が聞こえてきた。

だんだん近づいてくる。

ついに私の視界に3人が入った。

「うわ。ホントにいるし」

「何の用？」

「勝手にしゃべるな！」

言いながら一人が蹴ってきた。

私は避けることができずに、そのまま左足に受けて膝を付く。

「お前な。いい加減にしろよ？ 私たちが忠告してやってるんだから大人しくしてろよ」

「だからただの友達・・・」

「しゃべるなって言ってるだろ！」

また私を蹴ってきた。

今度は一発だけじゃなくて二発、三発と続けて蹴る。
私はついに耐え切れなくなつてその場に倒れる。

「なんかむかついてきた。お前の髪つて私の髪型をかぶってるんだよな」

「たしかに！」

「ねえ切っちゃおうよ。ほらハサミもあるし」

「準備いいなあ。よし。これから散髪してやるよ」

ハサミを持っていない二人が私を無理矢理起こし、両腕を押さえて壁に立たせる。

「ちゃんと押さえてけよ」

髪の毛にハサミが近づいてくる。

髪で済むなら安いもんだと思った。

きつと切ったら満足してイジメが終わるかもしれない。
そう考えていた。

しかし現実はそんなに甘くなかった。

腕を押さえていた一人が言った。

「こいつの制服切っちゃえばもう学校来ないんじゃない？」

「たしかに」

「お前頭いいな。じゃあ散髪から制服の裁断にするか」

髪の毛に迫っていたハサミは方向を変えて、スカートの裾へと向かつていった。

制服を切られたらバレちゃう！

親にも隠してるのに！

私は必死に抵抗した。

「こいつ急に暴れやがって！」

「おとなしくしろ！」

両腕を押さえられながらも必死に抵抗する私。

しかしハサミは止まらない。

ついにはスカートを手で押さえながらハサミを入れてくる。

「何やってる！」

その声に反応して全員が声のした方向に目を向けた。

ハサミを持った女の後ろに加藤君が見えた。

「加藤君・・・」

「吉野さん!？」

驚いて目を丸くする加藤君。

三人はハサミを後ろ手に隠すと、何もなかったかのように私を開放した。

「・・・何してるの？」

「・・・・・・・・」

私は答えられない。

「私たちと遊んでたんだよ。なあ？」

「そうそう！」

「たしかに！」

三人は口々に言った。

「そうなの？ 吉野さん？」

何も言えずにただ立っているだけの私。

「吉野さん。こっちに来て。一緒に帰ろう？」

フルフルを首を振る。

「ねえ。正樹くん。もうこんなやつに関わるのやめなよ」

一人が言った。

「どうして？」

「だってこんな根暗で地味なやつと、正樹くんみたいな元気な人は関わっちゃいけないと思うんだ」

「たしかに」

「私もそう思う！」

「でも僕は吉野さんの友達だし」

「友達って・・・私たちは友達じゃないの？」

「友達だけど、吉野さんも友達だから」

「じゃあ私たちと吉野さんならどっちを選ぶの？」

私のほうを見てくる加藤君。

「吉野・・・さんかな」

「加藤君・・・」

途端にしおれた様子になる三人。

「わかった。こいつのことが好きなんですよ！」

ハサミを持っていた女が叫んだ。

他の二人も驚いている。

私はドキッとした。

「・・・うん」

「え・・・」

加藤君は私を見ながら頷いた。

「マジかよ・・・帰る」

「ちょっと待てよ！置いてくなよ！」

「たしかに！」

そう言って三人は加藤君の横を通って去っていった。

イジメ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

一応次で過去編が終了します。

今のところ君子目線でお送りしていますが、真の主人公は最初に出てきたあの男ですからね。
期待しててください。

では次回もお楽しみに！

転校

私と加藤君はその後のなりゆきで付き合うことになった。

って言っても、加藤君はみんなに内緒にしておいて欲しいらしく、まだ誰にも言っていない。

もちろん明子にも。

そしてその次の日からイジメは無くなった。

というよりも今まで以上に加藤君が近くにいるようになったので、イジメができなくなったと言う感じだった。

そして私と加藤君が内緒で付き合い初めて1ヶ月ぐらいが経ち、6月も終わりに近づいてきたある日。

その頃には、二人の時は互いに名前呼び合っていた。

明子が掃除当番で遅くなるので、学校帰りの駅までの道を二人で歩いていた時だった。

「え？ 転校？」

正樹が大阪へ転校するということを聞かされた。

転校は前から決まっていた、夏休みには引っ越してしまうらしい。

「そうなんだ・・・」

「ごめんね。なかなか言い出せなくて」

「ううん。私たちはどうなるの？」

「どうしたい？」

そう聞かれると困る。

私は遠距離でもなんでもいいから正樹との関係が続けたかった。

「遠距離とか・・・ダメかな？」

正樹が迷惑ならと思ったけど聞いてみる。

「遠距離ってつらいよ？なかなか会えないし、何かあってもすぐに行けないし」

「でも気持ちがつながっていれば大丈夫だよ！」

「・・・そうだね。じゃあまた大人になったら会おう！」

そう約束した。

そして正樹は7月の終業式の次の日には引っ越していった。
私と明子は二人で空港まで見送りにいった。

「見送りなんていいのに」

すこし照れたように微笑む正樹。

「そんなこと言わないでよ。最後かもしれないんだから」
「それフラグ」

明子が縁起でもないことを言う。

「アハハハ。じゃあね。照井さんも君子も元気だね」

「うん。メールとかするね」

「加藤君も頑張れよ！」

搭乗口へと姿を消していく正樹君を見送った。

その帰りの電車の中。

「君子と加藤君って付き合ってたんでしょ？」

「え！？なんで知ってるの！？」

「そんなのバレバレだよ。見てたらわかるって」

「バレてたのか・・・」

テヘへと頭をポリポリとかく。

「さみしくないの？」

「そんなこと・・・ないよ・・・」

しばらく正樹に会えないと思うと涙が溢れてきた。

「ほら。俺の胸を貸してやるよ」

「誰それ・・・」

明子の冗談にツツコミを入れて乗り換えの駅まで私はずっと泣いていた。

そして今、高校3年の5月。

正樹とはあれ以来ずっと会っていないけど、心が通じ合っていると信じて遠距離恋愛を続けている。

最初のうちはどうしようもなく会いたくなかったけど、そういう時は正樹に電話をしたりして気を落ち着けていた。

こんなに会えないのが辛いものだとは思っていなかった。

会えない。触れない。声が聞けない。顔が見れない。

そんなこと愛があれば何とでもなると思っていたけど、正直会いに

いきたい。

でも約束は約束だ。

いつか大人になったら会うその日まで、頑張って人生を過ごしてやる。

「俺と付き合いませんか!?!」

「断るっ!!!!!!」

こいつも振って振って振りまくってやる!!

転校（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

やっと過去編が終わりました。

次回からはストーリーカー編です。

次回もお楽しみに！

ストーリーカー

変な男を振り続ける生活が続けて、現在6月。
5月のGWの休み明けから付きまとわれていたから、かれこれ1ヶ月になる。

「付き合ってくれ！」

「断る！何回言わせるの！？」

「何回でもさ！」

もうホントにこりないやつ・・・

「なら聞くけど、私のどこが好きなの？」

「どこって言われたら困るんだが・・・全部だ！」

「はいダメー」

「なんでだよ！」

「全部ってことは曖昧すぎるから」

「謀ったなー！シャア！」

「君の父上がいけないのだよ。って何言わせるんだ！とりあえずダメだ！」

振り向いて帰る。

なんか調子狂うな。

あの人、私のオタクネタのツボをことごとくついてくる。
やれやれだぜ。

家に帰ってメールを送る。

最近正樹は忙しらしく、メールはたまにしか返ってこない。
でも私と正樹は心が通じ合っているから問題ない。

次の日の朝。

「最近加藤君とどう？」

隣の席に座っていた明子が声をかけてきた。

明子とは3年になっても同じクラスで、しかも今は席が隣同士だ。

「なんか忙しいみたいであんまり連絡とってないかな」

「ふーん。じゃああの変な奴は？」

「あいつは相変わらずつきまといってくるよ。ホント勘弁して欲しいよ。こないだもガンダムネタで攻めてきて、思わず乗っちゃったもん」

「マジで？すごいなー。そこまでの確に君子の趣味を突いてくるとはなかなかやるな。ゲルググと名付けようか」
「なんでゲルググ！でもホントに的確なんだよねー。どっかで会ってるのかなあ？」

「私に聞かれても困るわ」

「だよねー」

「よーし席つけー」

「あ、先生だ」

先生が来たので会話を中断して授業に集中した。

そして放課後。

「アナタノコトガー好きダカラー！」

「・・・・・・・・」

「ちょっと！無視！？無視は勘弁してください！」

「もう何回来れば気が済むの？」

「あなたが僕の気持ちに答えてくれるまでです」

片膝について手を差し伸べてくる。

「だが断る」

その手をバシッと払って歩き出す。

「断らないでよ！加藤よりも俺のほうが絶対にいいって！」

ピタッ。

思わず止まった。

「どうして正樹を知ってるの？」

「あ……いや、その……」

「そんなことまで調べてるの？サイテー」

後ろで何か言っているが無視して歩き出す。

ただのストーカー気味の男だと思ってたのに、ホントのストーカーでしかも正樹のことを悪く言うなんて許せない。

次の日。

ストーカー男は現れなかった。

ついに観念して告白するのをやめたのか。

長かった。やっぱり昨日の一言が決定的だったんだと思う。

我ながらすごい冷たい声で言ったと思う。

あんなやつに同情なんてする価値も無い。

そのまた次の日。

またストーカー男は現れなかった。

更に一週間。

あれから一度もストーカー男は現れなかった。

私にとってはこれが普通なんだろうけど、少し罪悪感を感じた。

いや、ホントに少しだけだよ？1ミクロンぐらいだよ？

この話を明子に話した。

「いいことじゃないか」

「そうなんだけど・・・」

「なにに？もしかしてもしかしてちょっとさみしいの？」

「そ、そんなことないよ！」

「必死になるところがまた怪しいでござる」

「ちよつとからかわないでよー！」

別に異常から通常に戻っただけなんだから問題ないはずだ。

それに私には正樹が・・・

「正樹・・・何してるんだろ・・・」

あの男のせいで忘れてたけど、ここ最近正樹から連絡がないんだっ

た。

電話は無理でもメールぐらいくれたらいいのに。

まあ今年は受験もあるから授業とか大変なのはわかるんだけどちょっとさみしいなあ・・・

ストーカー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかいただけると発狂してます。

ここまでテンプレ。

こんなストーカーなら楽しそうですね。

次回もお楽しみに！

公園

ストーカー男が居なくなってから丸二週間。

一つの厄介だった問題が解消された私は、正樹のことで頭がいっぱいになりつつあった。

どうして電話くれないの？

どうしてメールの返事をくれないの？

今なにしてるの？

時々ひどくなると、夜に勉強をしていて泣き出してしまうほどだった。

「でも正樹と私は・・・」

本当に正樹と私は心が繋がっているの？

そんなことまで考えてしまう私はダメな子だ。

あの時私のことを助けてくれたんだから、今度は私が頑張らなきゃ。
我慢我慢！

「君子・・・大丈夫？」

ある日の朝、学校で明子に言われた。

「あんた泣いたでしょ？」

「なんでわかるの？」

「だって目の周り真っ赤だよ。なんか辛いことあった？」

「まあ・・・ちよっとね」

「私で良ければ話聞くんよ」

私は明子に甘えて話を聞いてもらうことにした。

いい友達を持ったと思った。

そして放課後。

いつもの帰り道とは少し離れたところにある、公園のブランコに二人で腰掛けた。

通学路とは少し離れているから、他の人が来ることは滅多にない。私は正樹のことについて色々話した。

「もしかしてだけどさ、加藤君ってもう別れたんじゃない？」
「やっぱりそう思う？」

私も少し思っていた。

「でも連絡ぐらいしてくれてもいいのにね。と私は思うけど、君子から電話はしたの？」

「してない。なんか怖くて」

「そりゃ怖いかもしれないけど、そのままズルズル引きずっていくよりはいいと思うけどなあ」

「うん・・・」

明子はブランコをこぎながら私の返事を待っている。

でも私はなかなか踏ん切りがつかなかった。

正樹のことはすごい好きだ。

それに正樹がホントに忙しいから連絡できないのかもしれない。

でもいくらなんでもこれはおかしい。

もしかしたら事故にあって連絡ができないのかもしれない。

でもだからといって電話ぐらいは使えるはずだ。

いろんなことを頭で考えてしまう。

これが遠距離恋愛なのだ。

相手からの情報がないとなにもわからなくなって、結局自分自身で

解決せざるを得なくなつて、どんどんどん悪い方向へと考えてしまう。

「明子・・・私どうしたらいいんだろう・・・」

「君子・・・」

答えを待っていたはずの明子も、私の表情を見て返す言葉がなくなつてしまったようだ。

「なら俺に任せてくれないか！」

突然、公園の中に声が響いた。

何事かと思つて公園の入口を見ると、あのストーカー男が立っていた。

「何あれ？」

「えーと、照井明子さんだったかな？はじめまして。長谷川隆夫と言います」

「あ。ご丁寧にどうも」

「おじぎしないでよ！明子！あいつが例のストーカーよ！」

「なんと！やっぱり変態紳士っていたんだ！」

変なところに驚いている明子を横目に、ストーカーに声をかける。

「なんの用？」

「そんな冷たい目で見ないでくれ」

「明子。帰りましょう」

「だから無視はやめてって！」

「なんか言ってるけどいいの？」

「いいのよ。いつものことだから。帰りましょう」

「加藤の話だろ？」

唐突に話を戻すストーカー。

「まさか立ち聞きしてたの？」

「違う。うちはそこだ」

彼の指さした方向を見ると、公園の周りを取り囲むような形で生えている木の隙間から家が見える。

あそこからならこの公園はばっちり見えるわけだ。

「たまたま窓の外を見たら、ブランコにすごくしょんぼりした吉野君子がとお友達が座っているではないか。こんなにしょんぼりさせるのは加藤のやつしかいないと思った。そして家から出てきて今に至るというわけだ」

「説明乙。つまりあんたは加藤君について何か知っているということ？」

「まさにそのとおりだ」

自信満々に胸を張るストーカー男。

ホントに大丈夫なのだろうか？

公園（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

真実

「じゃあまずはウチにくるか？」

「行かない。ここで聞く」

「さいですか」

なぜかしょんぼりするストーカー。

すぐに背筋を伸ばして気を取り直して話し始めた。

「俺には大阪に友達がいるんだ。この間のGWにその友達が大阪案内をしてくれるっていうから、飛行機に乗って行ってきたんだ」

急にストーカーの大阪旅行記が始まってしまい、私と明子は顔を見合わせた。

アイコンタクトの結果、何か意図があるのだろうかということで大人数しく聞いていた。

「……で、そんなこんなで大阪に着いた俺は、空港で待っててくれた友達と一緒に観光して一日目を友達の家に泊まった」

「これちゃんと正樹に関係あるんでしょうね？」

「まあのんびり聞いててくれ。そして次の日だ。友達が紹介したいやつがいるって言うから、一緒にそいつと待ち合わせている駅まで行ったんだ。なんでも去年の夏休み明けに転校してきて、俺の友達と仲良くなったらしい」

「夏休み明けて……」

「そうだ。そいつが加藤だった。加藤はすごい馴染みやすいやつで俺とも仲良くなった。そして俺たちはまた観光……というよりも道頓堀に遊びに行った。さんざん遊んだあとに夕食をファミレスで食べてたんだ」

「で、長谷川君は北海道からわざわざ来たの？」

「まあな。こいつが観光案内してくれるって言うからな。飛行機代だけで良いっていうからこいつの家に泊まった」

「まあ最終日に全額請求するけどな」

「お前鬼か！」

「僕も北海道出身なんだよー」

「へえーそうなのか。どこらへん？」

「えーと札幌の端っくらへん」

「マジで？俺もそっちの方だ」

「ホント！？もしかして学校も一緒だったりして」

「俺は相野高校だ」
あいのこうこう

「うそ！同じじゃん！」

「マジでか！！何組！？」

「9組」

「あーなら仕方ないよな。俺1組」

「あー反対側だもんねー。そりゃ会わないかもねー」

「そういやこいつ彼女置いてきたらしいぜ」

「だから彼女じゃないってば」

「どういうことだ？」

「ほら。話してやれよ」

「わかったってば。いじめてるところを助けたら勢いで付き合っちゃった彼女がいたんだ。でもその時には転校も決まってたし、それまでなら別にいいかなーって思って付き合ってたんだ。で、その転校するって言った時に遠距離でもいいって言われちゃって。僕はそんな気はなかったんだけど、向こうは別れる気はなかったみたいで・・・で毎日のようにメールがくるんだけど、最近はもう返事も返してないかな」

「お、お前はそいつのこと好きじゃないのか？」

「もともと友達以上ではなかったよ。助けたのだったまたまだし。友達が困ってたら助けちゃうでしょ？」

「まあ確かにそうだが・・・なんて子なんだ？」

「同じ9組の・・・って今は多分違うけど。吉野君子って知ってる？」

「いや、知らない」

「こんなこと言わないでよ。これは僕たちの秘密だからね？今だから言えるゝ的なやつだよ」

「もちろんだよ！な。隆夫？」

「も、もちろんだ」

一通り話したストーカーがこちらへと目を向けた。

話しながらジェスチャーも加えていたのに、なぜかわかりにくかった。

でも正樹のことだけはちゃんとわかった。

「正樹はわたしのことも思ってなかったんだ・・・」

「君子・・・」

「・・・私なにしてるんだろ？」

「まあこっちに帰って来て、早速吉野君子を探したんだ。顔がわからないやつを探すのは大変だった」

「ならなんであんたがストーカーまがいのことをしてたのよ」

君子がストーカーに向かって言う。

「少しでも加藤のことを忘れてほしくてな。俺は不器用だからそんな方法しか思い付かなかったんだ。吉野君子を見つけた時、すごいつらそうな顔をしていたのを覚えている」

見すぎじゃない？とも思ってたけど、そんな軽口を叩けるような心情ではなかった。

「だから俺は変なやつを演じることで吉野君子につきまとったんだ」
「あんたいいやつだな」

「まあ困ってるやつがいたらほうっておけないんだ。それに迷惑をかけたのは事実だ。すまなかった」

「いやいや、あんたは悪くないよ。むしろ感謝すべきだ」

明子とストーカーの二人で話が進んでいく。

正樹がホントにそんなこと言ったの？
信じられない。

私は正樹のことが好きだったのに・・・
私の気持ちはどうなるの？

「・・・嘘でしょ？」

「「え？」」

「嘘なんでしょ？正樹がそんなこと言うわけないもん。ねえ、あなたが勝手に作った話なんでしょ？」

ストーカーの肩をつかんで前後に揺らす。

「残念だが真実だ」

真実（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

だんだんと話が暗くなってきました。

ということで次回もお楽しみに！

ぐちゃぐちゃした気持ち

残酷な真実を叩きつけられた私は、いつのまにか家で寝ていた。どうやって帰ったかもわからないぐらい記憶がぐちゃぐちゃになっていた。

もしかして全部夢だったのかなあ？

そう思ってケータイを開いてみると、返事が返ってきていないメールの履歴。

それだけで現実に戻される。

また悲しくなる。

必死にあの話を嘘だと信じたい自分があるのだが、現状を見る限りでは真実を受け止めるしかないような気がしてくる。

信じたくないのに信じるしかない。

正樹を信じている自分を信じたいのに、信じれる要素がない。

こんなに遠距離恋愛が辛いものだとは思わなかった。

もし遠距離じゃなければ、今すぐ会いに行って事情を聞けるのに・

話を聞きたい。声が聞きたい。本当のことを聞きたい。

片方が拒否するだけで全部できない。

心どころかケータイすらつながってないじゃないか。

「こんなおもちゃなんかっ!!」

壁に向かって思いっきりケータイを投げつけた。

開いたまま投げたせいで変なぶつかり方をし、上下を繋ぐ部分が壊れて綺麗に二つになった。

一瞬やってしまった、とも思ったけど、どうせ連絡も来ないんだしもう私には必要なかった。

制服を着たまま布団の中に潜り込んだ。

次の日。

朝になってお母さんが起こしに来たけど、頭が痛いと言っ
て学校を休んだ。

両親は共働きのため、昼間は誰も家にいなかった。

静かな家の中でその日は布団の中に潜って、一日中沈んだ気分
のまま過ごした。

その次の日。

また嘘をついて休んだ。

お母さんは病院に行くように言ったけど、寝てれば治ると言っ
てまた布団の中で過ごした。

そのまた次の日。

土曜日のため学校は休みだった。

お母さんが朝に様子をみに来たけど、また仮病を使って布団に引
きこもった。

だんだんと気持ちが収まってきたけど、なんとなく布団から出た
くなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？」

顔を向けると、中学1年の妹のかずみ一美がドアから部屋をのぞき込んで
いた。

この間まで小学生だったのに、今はもう中学生だ。
時が経つのは早いなあ。

「大丈夫だよ」

「あのね。明子さんからメールがきて、お姉ちゃんのケータイに繋がらないから様子を見てくれて言われたの」

明子と一美はメールアドレスを交換している。

無理矢理明子が聞いたんだけどね。

リアル妹がほしかったらしい。

「ごめんね。大丈夫って言うって」

「わかった。お姉ちゃんのケータイは？」

そういえば壊れたんだっけ。

「あれ？それ・・・ケータイ壊れたの？」

「あっ！」

一美があざとく床に落ちたケータイを見つけて拾い上げる。

慌てて布団から出てケータイを取り返そうと立ち上がるが、近頃の布団生活のせいでからだがバキバキいって動きにくくて一美までたどり着けない。

「お姉ちゃん・・・大丈夫？」

「ちょっと返して・・・」

「そんなことよりヒドイ顔だよ？」

「・・・メイクしてないからさ」

「お姉ちゃんメイクしないじゃん。お母さん呼んでこようか？」

「大丈夫だから！お母さんには言わないで！」

つい大声を出してしまった。

「・・・わかった。なんかあったら言ってよね。私たち姉妹なんだし」

「・・・うん。ありがとう」

ケータイを私の手に置くと、一美は部屋から出ていった。

話のわかる妹でよかった。

昔から小さいくせに空気の読める妹だった。
自慢の妹だ。

「はぁ・・・どうしょ」

もうこれだけ休んだりしていると部屋から出にくくなっちゃったなあ。
きつと明子も心配してるみたいだし。

そろそろ学校にも行かないとって思うけど、正樹のことを考えると
すごい辛くなってくる。

「お姉ちゃん」

閉じたドアの向こうから一美の声がした。

「何？」

「これから明子さんたちが来るって」

「え？明子に言ったの？」

「何も言っていないよ。言ったらお姉ちゃん怒るでしょ？」

「そっか。ごめん」

「別にいいよ。明子さんから伝言。私が行くまでに風呂に入ったり
歯磨いたりとかしとけ！だって」

「・・・わかった。ありがとう」

私はシャワーに入って歯を磨いてさっぱりした。

そしたらお腹が減ってきて台所で冷蔵庫を漁ろうとしていたら、お母さんがおにぎりを作ってくれた。

それを部屋に持っていき、明子が来るまで食べながら待っていた。しばらくしてインターホンが鳴った。

妹が出たらしく、部屋まで明子を案内してくれた。

「なんであんたもいるの？」

私の部屋の前にいたのは、明子だけじゃなくてストーカー男も一緒だった。

「あのあと気になってたんだが、吉野君子がなかなか学校に来ないから困っていたんだ」

「だから今日お見舞いついでに連れてきたの」

「一応女子高生の部屋なんだけど・・・」

「大丈夫だ。俺は気にしない」

「私が気にするっつーの！！」

ぐちゃぐちゃした気持ち（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とかいただけると見えないところで激しく踊り狂います。

なんか沢山書いてる気がするんですがまだ一桁話なんですなー
多分そろそろ鬱ターンが終わるはずです。

なんかデジャブ・・・

次回もお楽しみに！！

決意

「ちょっと！じろじろ見ないでよ！」

「見ていない。マンガのタイトルを見ていただけだ」

部屋に入るなりジロジロとストーカーが漫画をおいてある棚を見ている。

私は勉強机の椅子、明子はベッドを背もたれがわりにして床、ストーカーにはクツキーの大きいクツションを貸して本棚の前へと、それぞれが座った。

「意外と少ないんだな」

「「!？」」

私と明子はびっくりして顔を見合わせた。

女子高生の部屋にしては多いと思っていたんだけど、少ないとか言われたのは初めてだった。

明子情報によると『私が今まで見てきた女子高生の中でも一位二位を争うような多さだ』ということだった。

特大の本棚2つ＋αがあってもまだ少ないと言うのか。このストーカーは。

「そ、そんなに少ないの？」

「あ、いや、吉野君子のあのネタの引き出しの量からしたら少ないなと思っただけだ」

「そーゆーことか。私はガンダムとかはレンタルしたりして見ただけだからさ。でもジョジョは全部持ってるよ」

「ああ。俺も全巻持ってる」

私にとってジョジョは心のバイブルだ。
しかもこいつもジョジョラーだったとは。

「だよね！面白いよね！……って何しにきたんだ！」
「アハハハハ！！」

明子が突然笑い出した。

「な、なにさ！」

「いや、思ったより元気そうでよかったよ」

目を拭って笑いながら明子は言った。
そういえば落ち込んだことを一瞬忘れてた。

「……うん。まあね。来てくれてありがとう」

「もう大丈夫なの？」

「大丈夫かって言われると微妙だけど……そりゃ正樹のこと思い出すとちよつと悲しくなるし、泣きたくなるよ？でも今日だけで明子にストーカー男に一美にお母さんまで心配してくれてさ。こんなに迷惑かけてるようじゃダメだと思ったんだよね。だから正樹のことはもう忘れるよ。あ、でも忘れるっていうのは無理だけど、次に会ったらぶん殴ってやるぐらいの気持ちで生きていくよ。ってさっきおにぎり食べながら考えてたんだけどね」

「それでこそ私の君子だ！」

「ごめんね。明子」

「気にすんな」

「あとストーカー男もありがとね」

「俺も気にするな。あとストーカー男って言うのはやめてくれ」

「だって名前知らないんだもん」

「名前知らないって……何回も名乗ってるだろ」

「だって興味なかったんだもん」

「なら・・・今はあるってことか？」

「・・・ちよつとね」

・・・恥ずかしいこと言わせんな。アホ。

「そうか。長谷川隆夫だ。はせがわたかおよろしくな」

「長谷川ね。よろしく。私は吉野でいいよ」

「吉野だな。じゃあ俺と付き合ってくれ」

「だが断る！」

「そうか・・・なら友達としてよろしくな」

「・・・ホントに好きなの？」

「いや、特になんとも思っていないかな」

「「そうなの!？」」

「まあ知り合い以上恋人未満かな」

「なんなんだよ・・・」

こいつにちよつと興味を持ってしまった私がちよつと恥ずかしいよ！

「あれ？君子？顔赤くな～い？」

「そ、そんなことないよ！」

「やっぱり吉野はちっちゃくてかわいいなー」

「ちっちゃくないよ！ってゆーかちよいちよいネタを挟むな!!」

三人でアハハハと笑いあった。

この出来事をきっかけとして、私はストーカー男・長谷川隆夫に好意を持つことになった。

念のため言っておくけど、別に好きになったわけじゃなくて、興味

をもっただけで恋愛感情とかはとくにないからね。
ツンデレじゃないからね！

決意（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さてさて。長かった鬱ターンも終了となります。

次の話からは僕の暴走回（ラブコメ展開）となります。

鬱のターンはまたしばらく間を置いてからにしようかと。

というわけで次回もお楽しみに！

3組と8組

6月3週目

相野高校3年8組出席番号38番吉野君子。

数字だけ書くと3838となっていてとても覚えやすい。

いや、そんなことはどうでもいい。

今日は明子と長谷川にこの間のお礼も兼ねて何かを奢ろうと考えている。

明子には簡単に放課後の約束を出来たけど、問題は長谷川だ。

あの日、クラスを聞いたところ3組らしい。

同じ学校と言うのはなんとも驚きだった。

まあ2年の時は1組と9組という反対のクラスだったみたいなので知らなくても仕方がない。

うちの高校は玄関が二つある。

東玄関と西玄関があってどちらから入ることができる。

靴は玄関にある空いている靴箱のどれを使ってもいいことになっている。

なのでマンガとかでよくある「下駄箱にラブレターが！」っていうのとは全くもって無縁な学校だ。

そして横長の学校なので階段も二つある。

1組から3組は西玄関と西階段、7組から9組は東玄関と東階段を主に使っていて、4組から6組はどちらか好きな方を使っていた。

なので西と東の使用者はそれぞれのクラスとは全く関わりがない人間もいるということになっていた。

私たちと長谷川も例によって関わりがない人間の一人だったというわけだ。

そして今私は長谷川のクラス・3組の前に立っている。

他のクラスに行くのって初めてだから結構緊張するな。

勇気を振り絞ってドアの前に立って長谷川を呼ぶ。

「長谷川！！・・・くん・・・います・・・か？」

どんどん声が小さくなった。

みんなの視線がこっちに集まるんだもん。

やっぱりお礼なんてやめておけば良かった。

「あれ？吉野じゃない？」

「たしかに！」

声の方を見ると2年の時に私をいじめていた3人がいた。

一瞬からだがブルっとした。一人がこっちに歩いてくる。

あの時は正樹が近くにいたから平気だった。

でも今はもういない。

逃げ出そうとしたけど、私のからだは凍ったように感覚がなくなっていた。

まさしく蛇に睨まれた蛙状態。

「吉野。あの時はゴメンね。あたしもまだ子供・・・」

謝られたってなんにも変わらない。

自分は少し楽になるかもしれないけど、相手は一生トラウマになるくらいダメージを受けているってことをわかってない。

イジメとはそーゆーもんだ。

「吉野？」

ふいに後ろから散々聞いていた声が聞こえた。

動かないからだでぎこちなく後ろを振り返ると長谷川が立っていた

「あ、は、長谷川」

やっとのことで声が出せた。
でも多分もうここでは声は出せないような気がした。

「どうした？何か用か？」

さっきの元いじめっ子が長谷川に何かを言っている。
私・・・正樹のことで少しは強くなったと思ったんだけど、少し思い上がっていたみたいだなあ。
全然動けないししゃべれない。
結局ぐるっと一周したただけで、根本的には何も変わらなかったのかもしれない。

「吉野。ちょっとこっち来い」

長谷川が私をじっと見る。
いじめっ子がまだ何か言っているのを無視して、長谷川に手を引かれてその場を離れる。
そのままされるがままに連れて行かれた先は、東階段横の自販機があるホールだった。

「ここならさっきの廊下よりは人は少ないだろ」

「あ、ありがと」

「そんなことよりどうした？なんか用か？」

長谷川は何も事情を聞かなくてくれる。
わざとなのかそれとも本当に気にしていないだけなのかわからない。
でもそれが今の私には心地よかった。
凍っていたからだ溶けていったのがわかった。

「あ、あのね。この間のお礼がしたくて」

「お礼？ あれはお見舞いに行ったただけだから別に何もいらないぞ」
「そういうわけにもいかないの！」

思わず食ってかかる私の頭を長谷川は手で押さえる。

「そこまで必死になるなよ。で、何してくれるんだ？」

「なんか好きなもの奢ってあげる」

「なんかかって言われてもな・・・俺欲しいものは自分で買うから他人からもらったものは使わないぞ」

人が奢ってあげるって言ってるのに、こいつやっぱり変な奴。
ってゆーかこんな人間初めて見た。

普通奢ってくれるんなら奢ってもらうのが常識じゃん。

「えー。なんか奢りがいのないやつだなー」

「えーとか言うな。そんなにお礼がしたいのか？」

「だって迷惑かけっぱなしだったし、私のためにあんなにいろいろしてくれたわけでしょ？」

「それはそうだが、別にお礼が欲しいとか感謝して欲しいとか思っ
てやったわけでなくて、俺がしたいとおもったからやったただけだ。
だから気にしないでくれ」

こうなったらもう意地でも奢ってやる。

私は目的を『奢ってあげる』から『何がなんでも奢ってやる』にシ
フトチェンジした。

「そんなこと言わずにさ。何か奢らせてよー」

「うーん・・・そこまで言うならひとつだけお願いしてもいいか？」

「さあなんでも言いなさい」

やっと折れてくれた。

思わず笑みが溢れてしまう。

「俺と普通にいろんな話をしてくれないか？」

3組と8組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

この回からラブコメ展開を増やしていきたいと思っています。

気分が乗らなくて無意味に書き溜めを投稿してるのは内緒です。

次回もお楽しみに！

待ち合わせ

私が長谷川に頼まれたのは『一緒にオタトークがしたい』と言うことだった。

あー見えて長谷川は友達付き合いが下手くそらしく（特に意外じゃなかった）、あまりオタトークをしたことがないらしい。

でも私をストーキングしてる時に垣間見せた、あのオタクならではの返しが気に入ったらしく大絶賛していた。

そりゃネタで振られたらネタで返すのが常識だしね。

しかも真正のジョジョラーに出会ったということもあって、一回腰を据えてじっくりと話をしたかったとのこと。

その話を教室に戻ったら明子にした。

「うはっ。やりおる。長谷川やりおる」

「どういうこと？」

「これで君子に好意が無いつてゆーのがすごいな」

「!？」

「私はお邪魔しないから楽しんでおいでよ」

「ちよっと！一緒に来てくれないの？」

「だってジョジョラーじゃないし」

つまり放課後に約束した私からのお礼は、私と長谷川のデート（長谷川はそんなこと思っていない）ということになった。

言われてみればそうだね。

放課後話がしたい↓男女二人きり↓カップルにしか見えない↓はたから見ればデート

こりゃ大変なことになった。

私だってまだ長谷川のことを好きになった訳じゃないし、長谷川だって私に好意が無いっていうのを言ってるからね。

いや、でもこの場合ってどうなるんだろ？

好意をもってくれたとして考えるべきなのかな？

でもでもただ単にあの時は答えを搾り出した結果、一緒にオタトークしたいって苦し紛れに言っただけかもしれないし。

なんかよくわからなくなってきた。

長谷川も全然表情筋を使って話さないから、感情がよくわからない。私をストーキングしてたときはすごいコロコロ表情が変わってた気がしたんだけど、あれは演技だったのかなあ？

ってゆーか・・・私はあいつのどこが好きなんだ！？

いやいや、別に好きじゃないし。

そんなこんなで放課後。

約束通りに待ち合わせをしている東と西の玄関の中間地点に来た。

互いの玄関が違うので、必然的に外での待ち合わせになった。

でもいざ到着して後悔した。

2年間すごしてきて全く知らなかったけど、この場所はカップルたちの待ち合わせ場所になっているらしく、1年も2年も関係なく、カップルたちの片割れみたいな人が待っている。

なんかここにいたら『私彼氏待ってます』みたいなオーラを出しているように見えるんだろうか？

いやいや、そんなオーラ出してないし。

今の私はきつと無表情だし。

ブチャラティのように冷静沈着な顔してるはずだし。

「何ブツブツ言ってるんだ？」

「うおっ！」

「うおっ！って・・・」

突然後ろから話しかけてきた。

長谷川には『背後から忍び寄るスキル』がついているのか？
教室のときといい今といい後ろから声をかけすぎじゃないか？

「びっくりするじゃない。話しかけるなら正面からきてよ」

「仕方ないだろ。西玄関から出たらこっちから来るのは普通だろ。」

吉野が東側向いてたから後ろから話しかけても不思議ではないと思う」

「た、たしかに」

意外と理論的な思考の持ち主だな。
星の本棚とか入れるんじゃない？

「とりあえずここから離れない？」

「ん？わかった。歩きながら話そう」

そう言って校門へ向かって並んで歩きだした。

なんか変にドキドキしてきた。

チラッと長谷川のほうを見たけど、相変わらずの無表情だった。

「そういえば照井はどうしたんだ？一緒じゃないのか？」

「なんか用事があるから先に帰った」

「そうか」

沈黙。

そういえば長谷川と二人だけで話すのって、ストーカーの時以外で初めてかも。

何話したらいいのか全然わからない。

「そういえば一つ聞きたかったことがあるんだが」

「何？」

「俺がストーキングしていた時、どう思っていたんだ？」

「ウザイと思ってた」

即答。

それ以外に思いつかなかった。

「いや、そうじゃなくて。こいつ変なやつだなーとかってことだ」
「ごめん。ちょっと意味が分からない」

ウザイが答えだとダメなのかな？
すごい的確な答えだと思っただけ。

「なんて言えはいいのか……。たとえば俺は吉野のことが好きな振りをしていた。でも吉野は加藤が好きだった。その状態で告白してきた俺にどんな感情を持っていたのかと思ったんだ。たとえば『少し好きかも』とか『こいつ私を好きになるなんて変な奴』とか」

この間の公園でも思ったけど、説明下手くそだな。

多分頭の中ではわかってるんだけど、人に伝えるのが凄く苦手なんだろう。

でもそんな長谷川は不器用なりに伝えようとしてくれているのが私は嬉しい。

・・・嬉しい？

なんでそんなこと思った？

「で、どう思ってた？」

ひとしきり話した長谷川が相変わらすの無表情で聞いてくる。

私の答えは最初の質問から変わっていない。

「それでもやっぱりウザかった」

待ち合わせ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

テラ少女マンガWW

次回もお楽しみに！WW

オタトーク

私と長谷川は高校から歩いて20分ぐらいのところにあるロッテリアに入った。

互いにロッテシェーキを奢るか奢らないかでレジでもめたが、結局私が押し切って奢ってやった。

ちょっとした満足感。

そしてカウンター席についてロッテシェーキを一口飲む。

「なんかありがとな」

「なにが？」

「わざわざこんなとこまで歩かせたし」

「いいよ別に。私も楽しかったし」

歩いてる間はずっとジョジョとかアニメの話をして盛り上がっていた。

好きなガンダムの機体とか好きなスタンドとか好きなシーンとかとか。

とにかく盛り上がって話していたら20分はあっという間だった。

気がついたら目の前にレジがあった感じ。

長谷川に至ってはお店の前に着いたときにびっくりしたらしく「ボスの仕業か？」ってつぶやいてたし。

「久しぶりにあんなに喋った気がする」

「長谷川ってあんなに喋るんだね。ちょっと意外だった」

「まあ普段はそんなに話の合う奴がいないからな。話すネタがないんだ」

「あーそれちょっとわかるかも。私も明子以外とは全然話さないもん」

まあ明子と長谷川以外に信用できる人がいないのもまた事実なんだけどね。

実は正樹のことがあってからちょっと人間不信になってたりする。あれから明子と長谷川以外の人とうまく話せないでいる。

そんなことを長谷川に知られたくないから隠していくつもりではない。

「吉野は暗いからな」

「・・・ホント？」

「なんだ。気づいてなかったのか。かなり話しかけにくいオーラを出してるぞ」

全然気付かなかった。

そういえば正樹と初めて話したときも、そんなことを言われた気がする。

でも普通に話しかけられても、話すことがないから別にいいけどね。

「それにしても長谷川ってズバズバ言うよね」

「こーゆー性格だからな。嫌なら治す努力はするぞ」

「努力だけかい」

「努力だけだな。たぶん治らないと思う」

「ふーん。まあそれが長谷川らしくていいんじゃない？」

「そう言ってもらえると助かる」

横目でこちらを見ると長谷川がわずかに微笑んだ。

正確には口角をほんの少し上げて目をほんの少し細めただけ。

私は長谷川の無表情とストーリーカーの時のあの謎の演技の表情しか見たことがなかったの、とても新鮮だった。

というより・・・かなりときめいた。

長谷川ってあんな表情するんだ。
かなりドキドキしてると思う。

今のこの中途半端な気持ちを揺れ動かすのには十分だった。

「どうした？」

今度はちゃんとこちらを向いて聞いてくる。

「な、なんでもない！」

「疲れたんじゃないか？さすがに休み明けにこの距離は遠かったとか？」

なんでそんなに無表情で聞いてくるかなあ。

逆にすごいよ。

「大丈夫。大丈夫ですから。疲れてないし楽しいから大丈夫」

私は手を前に出して大丈夫ですアピールをした。

「そうか。ならいいんだ。俺も楽しい」

表情こそ無いけど、長谷川がとても楽しそうなのはなんとなくわかる。

話してる時も声が少し弾んでるし、それになによりよくしゃべる。

好きなものに対して熱く喋るのはオタクの特徴だよー。

多分私という共感してくれる人間がいるから、いつもよりも更にしゃべっている可能性もある。

まあ全部私の勝手な妄想だけだね。

「今日はありがとう」

「え？何、急に」

「いやホントは来てくれるとは思ってなかったんだ。加藤のことがあったから、男とは話すのも嫌になるくらい男性恐怖症とかになってるかと思って」

だいたいあってるんだけどね。

「でもせっかく出会えたジョジョ仲間だから思い切って誘ってみたんだ」

「長谷川にはたくさん借りがあるしね。断るわけにはいかないよ」

「そうだったのか？これは借りを返すために来てくれていただけだったのか？」

やばっ。なんか変な言い方になっちゃった。

「いや、そういう意味じゃなくて、私が来たいから来んであって、別にやましい気持ちは」

「やましい気持ち？」

「あ、いや、違う！もーなんて言えばいいの！」

「逆ギレはやめてくれ」

「別に怒ってないわよ！なんだかんだで長谷川にはお世話になったから、長谷川に恩返しをしたいの」

自分でも何がいいいたいのかわからなくなってきた。

このままだとあることないこと言ってしまうそうさ。

「わかった。無理に言おうとしなくていい。実は今日誘ったのは、吉野が奢らせろってクラスまで来たときに様子が変だったから、こんな話をして忘れてもらおうと思ったからなんだ」

「え？」

「吉野は自分では気づいていないかもしれないが、とても危なっかしい人間だと俺は思う」

「どうということ？」

「加藤の時だってホントに死にそうな顔をしてたし、今日だってクラスに来たときにクラスの女子に話しかけられて固まっていただろう？」

やっぱり気づいてたんだ。

長谷川は私のことを見すぎだと思う。

そんなんじゃない好きって勘違いしてもおかしくないよ。

もうかなり好きってほうに傾いちゃったじゃないかコノヤロー。

「放っておいて前みたいに休まれても困るし、ましてや自殺とか考えられても困る」

「さすがにそこまでは・・・」

「だから自分では気づいていないって言っただろ。そういう意味で吉野は危なっかしい人間なんだよ」

ホントによく見てるな。

観察能力に優れすぎでしょ。

ジョルノかよ。

オタトーク（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

次回、新キャラ登場します。

ということで次回もお楽しみに！

ケータイ

「何読んでるの？」

「ん？新しいケータイのカタログ」

暦は7月の下旬。

今日、終業式が終わって、明日から夏休みだ。

長谷川といろいろ話したあの日から一ヶ月が経った。

あの日以降、特に何も進展がないまま一ヶ月が経った。

長谷川に対する気持ちに気づいてから一ヶ月が経った。

・・・ホントに何もなかったなあ。

そんなことを考えながら私は、家の居間で新しいケータイを買おうとカタログをペラペラとめくっていた。

学校帰りに近くの電気屋さんでもらってきた。

隣で夜ごはんがもうすぐできると聞いて二階から降りてきた一美がテレビを見ている。

ケータイを壊してからケータイの無い生活を続けていたけど、夏休みに入ってから明子と連絡が取れないのはちよつと寂しかったので買うことに決めた。

「それにしてもどれがいいのやら・・・」

まずケータイ会社だけでも3社。

さらにその中でも似たようなケータイがたくさん。

そしてさらにスマートフォンがたくさん。

もうわけがわからないよ。

一美は上にカシヤンって出るタイプのスライド式ケータイを使っている。

「ねえ一美。どれがいいと思う？」

「それくらい自分で決めなよ。困ったら見た目で決めちゃえば？」
「見た目ねえ・・・」

どうせどれを選んだって結局は『慣れ』だしねえ。
よし。決めた。明日見に行つてこよう。

「一美。明子に『明日暇だったらケータイ見にいかない？』メールして」

「いいけど・・・明日必ず決めてきてよね」

「なんで？」

「夏休み中ずっと私が明子さんとお姉ちゃんの中継するなんて嫌だもん」

「えー別にいいじゃーん」

「なにそれ。なんかお姉ちゃんキャラ変わったよね」

「え？そんなことないよ？」

「・・・そんなことあるから言つてんじゃん」

私は別に変わつたつもりなんてないんだけど、明子にも同じことを言われた。

やっぱり恋をすると人つて変わるんだろうか？

まあいいや。

「あ、返事きた。プッ！断られてるし！『ごめん、明日は無理だわ』だつてさ」

「ナンテコッタイ。仕方がないけど一人で行つてくるかな。一美も来る？」

「行かない」

「冷たいなあ。ツンデレかよ」

「デレはしばらく来ないけどな」

「ごはんできたわよー」

「はい」

そして次の日。

一人で街中まで出てきた。

すこぶる暑いのでなるべく外には出ないようにしつつ電気屋を目指す。

最近の札幌駅周辺は地下道が発展しすぎていて、外を出なくても大通公園の少し向こう側まで行ける。

一人で街中に出てきたのって久しぶりかも。

高校に上がる前はよく一人で来てたけど、明子と友達になってからは二人で来るのが当たり前だった。

「えーと電気屋さんは・・・」

いろんなところに貼られている案内板を頼りに電気屋までたどり着いた。

そして目の前に広がるケータイコーナー。

うん。まったくわからん。

これどれがいいんだろ。

店員さんと話すのが苦手なので、近づいてきた気配を感じ取りながら、逃げるようにいろんなケータイを見ていく。

でもこれといってピンとくるものがない。

スマートフォンも見てみたけど、私にはまだ早いと思う。使いこなせる自信がない。

「うーん・・・」

立ち止まっていると店員さんが近寄ってきた気配を感じたので、また足を動かして移動する。

店員さんが居なくなれば早く決まる気がする。

店員よ。いなくなれー。

そんな願いは通じず、また気配を感じて逃げ回る。

そしてついにはめんどくさくなってきた。

10分ぐらい歩き回ったのにピンとくるものがなかったせいかな、どのケータイでもよくなってきた。

近くにあった赤いケータイに決めた。

赤は3倍早いからな。

「あのすみません」

「はい」

「これください」

「かしこまりました。少々お待ちください」

「ありがとうございますー」

無事購入。

帰っているいろと設定しよつと。

時計を見ると時刻は午後1時。

ちよつとお腹空いたなあ。

そう思っていると、目の前のエスカレーターから見知った顔の人が降りてきた。

「あ。長谷川だ」

どうやらこちらの存在には気づいていない様子。
こちらキミーコ。

いつも背後に急に現れて驚かされるから、逆に驚かせたいと思う。
よし。作戦開始。

頭の中で一人会議を行い、長谷川の真後ろまで来た。
長谷川の驚く顔を想像して少しニヤける。

「長谷川！」

少し大きめの声で名前を呼んだ。
期待を見事に裏切って、特に驚いた様子もなく振り向く。

「えーと・・・どちら様ですか？」

・・・あれ？

もしかして人違い？

でも長谷川にしか見えない・・・

「え？あれ？」

でもたしかにいつもの無表情な長谷川と違って表情がある。

それに微妙に目の大きさとかも違う気がする。

「あのー・・・あ。もしかして吉野ちゃん？」

吉野・・・ちゃん？

見た目がほぼ長谷川な人にちゃんづけで呼ばれるとなんかムズムズする。

しかもめっちゃ笑顔。

「あ、はい・・・」

「やっぱりそうか！いやーホントに可愛いねー。なんか守ってあげたくなる感じわかるわー！」

「???」

「兄さん。吉野が困ってるじゃないか」

ふいに後ろから声がしたので振り向くと、もう一人の長谷川が立っていた。

「えっ？えっ？」

困惑した私は前の笑顔の長谷川と後ろの無表情の長谷川を交互に見る。

「は、長谷川が二人・・・？」

「吉野。落ち着け」

「そうそう。吉野ちゃんは少し落ち着こうか」

なんだこれ。

「吉野。こいつは俺の双子の兄の長谷川鳴海だ」
はせがわなるみ

ケータイ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

次回もお楽しみに！

ストックホルム症候群

私と長谷川兄弟は近くのオムライス屋に入った。

話を聞くと、あそこの電気屋さんの上のほうの階に、あの有名なモンスター育成ゲームのショップがあるらしい。

そこに二人で買い物に来ていたとのこと。

鳴海さんのほうが好きらしく、長谷川はただの付き添いだそうだ。

ちなみに呼び方は長谷川は長谷川。お兄さんのほうは鳴海さんで定着した。

「えーと、なんて呼べばいいですか？」

「じゃあグリーンで」

「え？なんでライバル？」

「おお！ホントに引き出しすごいね！ここまで知ってるとは。じゃあ鳴海さんでお願いします」

「わかりました。鳴海さんですね」

「それと一応同い年だから敬語は無しね」

「あ、ホント？ちょっと辛かったんだよねー。同い年に敬語とか」

「あれ？結構順応早い？」

「兄さん。そこは突っ込まないと」

「え？どういうこと？」

オムライス屋に向かう時にそんなやりとりがあった。

その時にひとつ分かったのが、鳴海さんは私や長谷川ほど引き出しが多くないらしい。

主にゲームが大好きで、一番がDSのモンスター育成ゲームというわけらしい。

ってゆーかあの一連の流れで気づいた長谷川はすごいな。さすが私
の見込んだ男だ。

そして各自オムライスを注文し今に至る。

「ところで吉野ちゃんは何してたの？」

4人がけの席の向かいに長谷川兄弟が座っている。

顔はほぼ同じ作りだけど、表情が全然違うから見分けられないことはない。

左が兄、右が弟。

「ケータイが壊れてたから新しいのを買ったの」

「へー。どんなやつ？」

「さあ？なんか赤いやつ」

「え？どういうこと？」

よく頭に『？』マークを浮かべる人だ。

今日だけでこのセリフ2回目だ。

私は隣に置いていた紙袋からケータイを取り出す。

鳴海さんに箱ごとわたした。

「なんかどれがいいのかわからなかったから適当に近くにあったやつにしたんだ」

「すごい選び方だね……。隆夫。吉野ちゃんってこんな感じなの？」

「いや、これは俺にもよくわからん。でもいろいろと適当なところもあるな」

地味に『適当』ってひどいな。

見てもわからなかったのか、箱を私に返してくる。

「へー。吉野ちゃんってB型？」

「A型」

「えー！意外だわ！」

「エー型だけにですね。ナイスリアクション！」

「さすが兄さん！」

「そんなつもりなかったわ！」

親指を立ててグットサインを出した私たちを鳴海さんがつつこむ。

鳴海さんはよくしゃべる人だ。

多分生まれるときに、長谷川の方も鳴海さんが持っていてしまったのではないかというほどによくしゃべる。

そのかわり長谷川はボケに専念(?)していた。

私からしてみれば、長谷川は私のピンポイントのボケによく気づくやつだと思う。

さすが私の元ストーカーだ。

そう考えるとストーカーに恋をしている私って、あのストックホルム症候群ってやつなんじゃないか？

いやいや。そんなことないさ。

「でもなんで血液型？」

「特に意味はないよ。なんとなく聞いてみただけ。でもA型には驚いた」

「俺も兄さんのリアクションに驚いた」

「だまらっしゃい」

「私、よくB型と間違われるんだけど」

「でもわかるもん。B型っぽいもん」

「そんなにかなあ？」

「自分のことは意外と気づかないもんだよ。ね、隆夫？」

「何が？」

「こっちの話」

首を傾げる長谷川に笑顔の鳴海さん。

ここでオムライス登場。

私のはホワイトソースとデミグラスソースの二色のソースがかかったオムライス。

鳴海さんのはデミグラスソースたっぷりのオムライス。

そして長谷川のは・・・なんだこれ？天津飯？

「長谷川・・・天津飯頼んだの？」

「！？」

「ちよっ！吉野ちゃん！ゲホゲホ」

驚いてこちらを見る長谷川と、一口目を食べた時に変なところに入ったのか、猛烈に咳き込む鳴海さん。

だって長谷川が頼んだのってどう見ても天津飯だもん。

あんかけっぱいやつの上に、若干半熟気味の卵がかかったオムライスってどう見ても天津飯じゃん。

「この揚げなすとあんかけオムライスは美味しいんだぞ」

「天津飯じゃなかったんだ」

「一見ミスマッチと思うけどいざ食べてみるとあんかけが和風で天津飯にかかっているあれとは全然違うしこの揚げなすがうまい」

無表情＋一息で言い切ると、オムライスを口へと運び、パクリと一口。

モグモグモグと咀嚼しながら頷き、ゴクリと飲み込む。
そして言う。

「目覚めよ。バツカス」

「食べる前に言えよ」

長いボケでもちゃんと突っ込むのを忘れない。

さすが私。うん。ツツコミの才能あるのかもしれないな。マンガとアニメとゲームネタに限るけど。

「ゲホゲホゲホゲホ」

鳴海さんはまだむせていた。

長谷川が背中をさすった。

ストックホルム症候群（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回は小ネタが多いです。

全部わかるかな？

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7054y/>

遠距離女としつこい男

2011年12月2日15時47分発行